

いわむろの里が創立30周年を迎えました。



ホスピタリティ(もてなしの心)で 安心・安全なケアを 提供してきた里の30年、 そして、続く未来へ

いわむろの里 事務長
(新潟県労働衛生医学協会 理事)

阿部 恵子

赤ちゃんが30歳の一人前の大人になるまで。それはそれは容易ではありません。それと同じ時間をいわむろの里(以下「里」)と共に過ごしてきました。

一言で言い表せないこの30年は、たくさんのご利用者さん、ご家族さん、そして大勢の職員によって積み重ねられてきた歴史です。

平成2年(1990年)初夏、里の建設工事が始まりました。それを当時岩室温泉病院(現、岩室リハビリテーション病院)の窓から眺めていました。平成3年(1991年)3月完成、4月15日開設。17日から入所スタート。

今振り返れば私をはじめスタッフは教科書に書いてあるようなことしか、わかっていなかったのです。日々の学びはご利用者さんから。どれが正解かよくわからない中、皆必死でした。相談員だった私は毎日入所スケジュールを立て、レクリエーションのメニューを考えたりしていました。『自分が楽しまなければ皆さんに楽しさは伝わらない』そう言い聞かせてチャレンジしていたことを思い出します。

入所開始からまもないある朝、上司に呼ばれ「Sさんが廊下のあちこちにおしっこしているらしい。家族を呼んで、帰ってもらいなさい」「ええ!!そのような方は時間を見てトイレにお連れすればよいと思いますので…」忘れられない、笑えないエピソードです。

介護保険もない、認知症の方をサポートしてくれるサービスもケアマネージャーもいなかった当時、里には、まるで駆け込み寺のように認知症の方が来られました。

相談員だった私は毎日『自分が楽しまなければ皆さんに楽しさは伝わらない』
そう言い聞かせてチャレンジしていました。

平成12年(2000年)、介護保険スタート。在宅サービスも充実し、施設数も増えてきました。入所の方は徐々に重度化し、医療依存度も多くなってきました。

そして、感染症との戦い!施設の成長は感染症との戦いの証と言っても過言ではありません。インフルエンザ、ノロウイルス、疥癬症。中でも、ノロウイルスにはどれだけ苦しめられてきたことか。“またかあ”そんな年が数年続きました。

「師長!いつかノロウイルスなんて怖くない、そんな時が来るよ。いつかちゃんと対応できて、拡大させることなく終わる日が来る!」皆で励まし合い、そして、それは現実となりました。

初期対応の適切さ、手技の正確さ、もう二度と利用者さんに不自由な思いはさせられない!という強い思いで私たちは乗り越えてきました。一步一步成長してきました。

令和6年(2024年)の春には、ベトナムの介護留学生が入ってきます。1年間、日本語を勉強し、その後、2年間介護の勉強をしてきます。里もまた進化していくことでしょう。

昨年からのコロナウイルス感染症で、ずっと緊張状態が続いています。クラスターのニュースを聞くたびに『明日は我が身』と思い、気持ちを引き締めています。

私たちは、ご利用者さんをお守りし、安全で安心してご利用いただける施設となれるよう努めてまいります。40周年へ向かって皆で頑張っていきます。



いわむろの里が創立30周年を迎えました。



I Love いわむろの里

大騒ぎの日々の思い出など

デイサービスセンター岩室

施設長

杉山 光順

平成3年(1991年)4月に開設した「いわむろの里」も、30年がたちました。私は、縁があって「いわむろの里」の開設に合わせて医学協会に入局し、お世話になり現在に至っています。

転職して医学協会に入る前に私は、システムエンジニア、電気機械関係の仕事をしており、医療・福祉のことは何もわからない、そんな私でしたが、開設時の里には男性がほとんどいない上、設備を管理する職員もいないということで、運よく採用していただいたのです。

当時は、20代の明るく、可愛らしい女性職員が大勢いて、30歳の私には「あーっ、なんという職場環境(ルンルン)」だったのですが、当時はすでに婚約中だったので、「しまったあー!」という感じでした。

開設時、「いわむろの里」は老人保健施設としては県内では先駆けの施設であったため、職員は、新卒が多く占め、あとは数人の管理職とでサービスを開始したのですが、驚いたのは、開設当日に、「当直職員がいるな!杉山、おまえ泊まれ!」と上司から言われ、この日から施設に泊まっ





驚いたのは、開設当日に、「当直職員がいるな!杉山、おまえ泊まれ!」と上司から言われ、この日から施設に泊まったことです。

たことです。

男性は私、看護師、調理師と3人だったので4月は、この3人のローテーションで当直をしました。ヘビーな勤務状態にもかかわらず、淡々と仕事をやっていた職員や自分を今さらながら振り返って、感心しています。

また、私をはじめ職員は、痴呆(現在は認知症)の入所者の行動が理解できず、対応に苦勞したことを思い出します。

たとえば、4階が痴呆階となっており、当直の際に早朝の見廻りをしていると、廊下のあちこちが水たまりのようになっており(実はおしっこ)、転びそうになったこと。

居室の洗面台の中にソフトクリーム状の固形物が置いてあったこと。臭いを嗅いだら便のようでした。(洗面台にどうやって上がってしたのだろう?)

突然の停電。(入所者がテレビのアンテナ線をコンセントに差し込んだ)

夜中の火災報知器鳴動。当直室で寝ていると、夜中の2時ぐらいに「先生、お話があるの」と戸を開けられ、起こされたこと。など、など。

環境設備担当の私は、とにかく何かあると直ぐに呼ばれ、大騒ぎの日々でした。

これまでのたくさんの職員たちの苦勞や経験が蓄積され、今の里があるのだと思います。

「いわむろの里」は、全国レベルの「新潟県介護老人保健施設大会」などの研究発表会では、真摯な介護への姿勢が評価されて、何回も賞をいただいたりするほど、立派な介護老人保健施設であると思います。

これからも、コロナ禍の中、里の職員の皆さんは大変だと思いますが、一人一人がが丸となりサービス向上に努め、ご利用者、ご家族、地域の皆さんからますます愛される施設になっていくことを祈念します。



デイサービスセンター岩室

1996年(平成8年)に旧岩室村の委託を受け、デイサービスの専門施設としてオープン。在宅生活をやさしくサポートするための健康維持、機能回復のほか、メンタル面でのバラエティに富んだ行事を提供しています。モットーは、アットホーム(わが家のように寛げる)です。一日を楽しく、快適に過ごしていただく、通所介護施設です。

いわむろの里が創立30周年を迎えました。



愛 ラブ いわむろの里

目配り・気配り・心配りで 里のパイプ役に

いわむろの里 医事・相談援助課
課長

本間 智子

私はいわむろの里が開設する約1ヵ月前に集団検診センターから異動して来て以来、30年をここで過ごしています。現在、里が順調に運営できているのも、当時の準備室の皆さんの苦勞と努力のお陰だと感謝しています。

開設当時は看護・介護・リハビリなど各職種の職員のご利用者さんへの専門的で手厚い仕事ぶりを見て、事務部門の私は何か事務職でも手伝える事はないかしら?といつも思っていました。現在は少しでもご利用者さん、ご家族、職員とのパイプ役になって双方の意志の疎通をはかり、里での暮らしがスムーズに行くよう、目配り・気配り・心配りを目標に努めています。

今回の「愛ラブいわむろの里」と書くにあたり、一番に閃いたのは里の『千手観音』様です。きっと、県内で神々しい千手観音様がいらっしゃるのはいわむろだけだと思います。

開設当時は、里の玄関に入って左側に売店スペースがあり、食いしん坊の私は密かに売店の営業が開始される日を待っていました。

そうこうしているうちに、長男を出産し、1年後の産休明けに会社へ復帰したとき、新しい木色の生まれたてのような千手観音様が売店のスペースにぴったり鎮座されていて、びっくり。こんな近くで千手観音を見るのは初めてで、衝撃を受けました。

この直後に千手観音様の開眼式があり、ご利用者さん、お客様、職員がロビーに大勢で参加し、岩室の種月寺の住職様からお経をあげていただき、開眼式のお祝いにと紅白の千歳が参加者全員に配られました。私もありがたい気持ちでいただきましたが、上品なお味が今でも

♡ (産休明けに) 入社したとき、売店のかわりに新しい木色の生まれたての千手観音様が売店のスペースにぴったり鎮座されていて、びっくり。

忘れられません。

ご利用者さんが初めて里に来所される時、最初に千手観音様を紹介すると、入所に不安そうな顔をされている方は必ず驚かれて、「立派な観音様だね」と笑顔になります。「これから観音様がお守りしてくれますよ」と鐘をならして一緒に手を合わせます。また、ご利用者さんがリハビリの途中に「観音様のお手は何本あるのかしら?」と立ち止まれば、「一緒に数えてみましょう」「頭の上にもお顔が何個もありますよ」などと観音様を前にして話が弾みます。

お風呂上りにもお参りするご利用者さんもいらして、一日何回も観音様をおがむ鐘の音が聞こえます。人間は年を重ねるごとに感謝の念と謙虚な心が増すのだと、あたたかい気持ちになります。

余談ですが、結婚した里の職員がお願いすると子どもを授かるらしく!!「子宝観音」と呼ばれる時もあります。

ご利用者さんと職員も見守ってくれる里の大切な千手観音様に、コロナ禍を一日も早く収束できるようにと、皆で一緒に祈っています。

これからも新しい生活様式に対応して変えるべきところは変え、ご利用者さんがより健やかに、安全に生活できるよう色々な面で努力していかなくてはならないと思っています。

いわむろの里は、これからもいっそうご利用者さんやご家族との絆を深めながら、思いやりの精神をベースにして歩んでいきます。



里では、毎年2月におひなさまを飾り、3月3日のひなの節句には春のちらし寿司特別メニューでお祝いしています。

いわむろの里が創立30周年を迎えました。



アイ♥いわむろの里

今でも、自分の分身のようで 気になる存在

社会福祉法人すこやか福祉会 特別養護老人ホーム
ゆきわりの里 施設長
(社会福祉法人すこやか福祉会理事)

矢崎 廣美

私が医学協会に就職したのは、1975年(昭和50年)の3月で岩室温泉病院(現岩室リハビリテーション病院)の医事課配属でした。その後、結婚退職して上越市へ。そして、ある偶然の邂逅から再び医学協会で働かせていただく事になったのです。

それは、1990年(平成2年)の年末に、とある所で偶然に故・藤口七智名誉会長にお会いし近況報告などしている内に「来年、新しい施設がオープンするので、来ないか」と声を掛けて下さったからなのです。

1991年(平成3年)2月、いわむろの里開設準備室に配属となった私は、上司の指導の下、一から里の事務職としての心得を教えられました。

専門職員(介護、看護、リハビリ)は自分の仕事に対し、高いプライドを持っている。そのため、常に事務職は、直接ご利用者さんに関わる専門職の意見を尊重し、思いやって、支えるという



♡ 里の開設当初から私の思いは、一貫して現場第一主義です。
♡ 現場での意思を尊重し、思いやって支えるという気持ちで行動すること。

気持ちを大切に行動しなければならない。現場第一主義であることが、ご利用者さんの尊厳と笑顔につながり、専門職員の仕事への意欲とやりがいにつながる。そのためには、「事務職は縁の下の力持ち」。この精神を徹底し、仕事をしなさい、というものでした。

30年前には、近隣に老健はなく、すべてにおいていわむろの里は手探り状態からの出発でした。介護、看護、リハビリ、事務職員総出で昼夜、会議(あの相談、この相談)の連続でしたが、ご利用者さんに家庭ではないけれど、気持ち的に安心し落ち着いて、しかも、晴れやかに生活することが出来る場所=いわむろの里を皆で作りに上げるため、どんなに多忙でも泣き言を口にする職員は皆無でした。

また、ご利用者さんが毎日を明るく楽しく、晴れやかに生活する場所に相応しいシンボルカラーとしていわむろの里では、職員のユニフォームを始め、食堂の椅子から封筒に至るまで、ピンク(柔らかく、暖かな春色)にこだわりました。このようなイメージ戦略もいわむろの里は開設当初から行い、施設づくりに活かしてきました。

開設当初からのメンバー阿部恵子さん、杉山光順さん、本間智子さんと共に、里での在籍期間が短くお手伝い程度の私でしたが、それぞれが各自の立場で考え、ベストと思われる判断を下し、行動をして来たと思っています。30年経ち、現在のいわむろの里は、阿部恵子事務長率いる75名の大所帯になり、どこにも負けない、医学協会が誇る老人保健施設に成長しました。

いわむろの里で私は、事務職としての心得と現場主義を学び、ご利用者さんの笑顔と職員の仕事へのやりがいを感じられる施設を目指し、日々奮闘する職員とともに過ごして来ました。里は、今でも私の分身のようで、気になる存在です。里のますますの発展と職員の皆さんのご活躍を期待しています。



特別養護老人ホーム ゆきわりの里

2014年(平成26年)4月に開設。1Fは従来型特別養護老人ホーム(定員40名)、2Fはユニット型特別養護老人ホーム(個室60室)で、個人の自立を尊重するため、1ユニット10人以下のグループに分かれています。利用者の尊厳を守り、心から喜んでいただける施設づくりをめざし、家庭的な雰囲気の中でケアを行っています。